

鴨川市慈恩寺の「名も無き女の碑」

松苗禮子 (語り部「さくら貝」代表)

風雪にとざされし 暗き道
春未だ来ぬ 遠き道
されど 春の来るをまちつつ
久遠にねむれ
汝 名も無き女よ

これは、「従軍慰安婦」のために建てられた鎮魂碑に刻まれた言葉です。

皆さんは、千葉県の鴨川シーワールドをご存知ですね。その鴨川市に、元兵士だった二人の男性が建てた「従軍慰安婦」のための鎮魂碑があるのです。

この「名も無き女の碑」に関するお話は、すでに、1992(平成4)年に、房州でNHKラジオの農水通信員として活躍しておられた山田恵一さんの取材により、NHKラジオ『ひるのいこい』で全国放送されております。山田さんの著書『町から村から』にも掲載されているものです。

私が初めて見たとき、鎮魂碑は一面苔に覆われ、台座が傾きかけていて、今にも倒れそうでした。

「この石碑が崩れてしまえば、慰霊碑にまつわる話題も消えてなくなるのだ。何とかしたい」と思った私は、山田さんの了解を得て、「語り」として伝えさせていただくことにしました。

鴨川の市街地から少し離れると、見渡すかぎりの田園風景が広がります。刈り取られた稲の切り株に、短いながらも二番目の穂がシッカリと頭を垂れています。すでに春を備えた作業が始まっていて、切り株ごとに掘り返された新しい土と、淡い黄金色の斑模様が続く田の上を、1月の風が何処までも吹きわたっていきます。そんな鴨川から保田方面に通じる幹線道路の一郭に「花房製菓」の工場があります。県南一帯の学校給食のパンを供給している「はなぶさのパン」の工場です。

「名も無き女の碑」は、工場に近い、慈恩寺の入口左側に建てられた鎮魂碑です。歩幅にして横10歩、縦9歩ほどのブロックに囲まれた敷地の中にあり、台座も含めて3mもあろうかと思われる立派な石碑です。

表には「名も無き女の碑」と刻まれ、裏には、
〈今次の大戦に脆弱の身よく戦野に挺身 極寒暑

熱の大陸の奥に又遠く食無き南海の孤島に戦塵艱苦の将兵を慰勞激励す 時に疫病に苦しみ敵弾に倒る 戦い破れて山河なく骨を異国に埋むも人之を知らず 戦史の陰に埋る嗚呼 此の名も無き女性の為小碑を建て霊を慰む

昭和四十八年十月建立 東京 井谷 忠衛
とあります。花房製菓の先代のご主人・刈込善一さんが、東京の洋菓子の先生・井谷忠衛さんと二人で建てた慰霊碑なのです。

刈込善一さんは、すでに、1983(昭和58)年に69歳で亡くなられ、妻の富美代さんがその遺志を継いで、ずっとこの碑を守ってこられました。地元の檀家の皆さんも協力を惜しみませんでした。私は、この御夫婦の深い愛の絆と、地元の皆さんの温かさに、心打たれます。

富美代さんは、真っ白い髪の毛を耳の下で切り揃え、後ろに梳かしてヘアバンドで止めて、身のこなしも軽く、若々しくモダンなご婦人でした。私はお宅に何度もお邪魔して、お話をお聞きしました。

夫の善一さんは、満州事変・支那事変・太平洋戦争と3つの戦争に衛生兵として従軍されました。終戦間際には、南方のアンガウル島から、傷病兵をパラオ本島に送り届ける任務中に潜水艦の攻撃を受け、船は傷病兵もろとも沈没。九死に一生を得たのだそうです。しかも、その間に、アンガウル島の本隊は全滅してしまい、部隊のたった一人の幸運な生還者となったのでした。

運良く、終戦の年の12月に故郷の土を踏むことが出来ましたが、初めて会う息子さんは5歳、急に現われたお父さんに驚き、馴染むまでには随分時間がかかったと言われました。長い軍隊生活の中で、善一さんは富美代さんあてに、小まめに手紙を送りました。帰還後は、堰を切ったように、軍隊での出来事を次々と語ってくれたそうです。

善一さんは、「これからは洋菓子の時代」と考え、今までの家業の和菓子作りを洋菓子に切り換えることにしました。そのため、東京の井谷さんに、泊まり込みでの指導を何回も受けました。

昼間はパンやケーキの作り方の個人指導。仕事が終わると、一杯やりながらの夕食となります。井

谷さんも偶然同じパラオの兵役とあって、二人は大変話が合ったそうです。話が深まるうちに、話題は、「従軍慰安婦」だった哀れな女性たちの末路に及びました。

「軍人や軍属は戦死すれば、靖国神社に祀られるが、慰安婦であった女性は、何の供養もされない。是非、慰霊碑を建てて、その霊を慰めよう」と、意気投合しました。思いついたら実行一と、遂に資金を用意して、慰霊碑建立の準備を始めました。

ところが、周囲の目は意外に冷たく、「汚らわしい女の慰霊碑なんてえ」と、反対の声が上がり、石碑の建立場所も二転三転。やっと、現地に決まったということです。そんな事情もあって、富美代さんと地元の人々の力で供養が続けられているのですが、除幕式は行われていないままです。

さて、話は変わりますが、実は私の住む館山市にも「従軍慰安婦」の碑があるのです。1985(昭和60)年に建てられ、外国でも知られている慰霊碑です。この碑は「かにた婦人の村」という婦人保護施設の、一人の女性の血を吐く思いの訴えがきっかけで建てられました。ここに、「かにた婦人の村」から出版された書物の文を引用させていただきます。

〈戦後40年にもなるというのに、日本のどこから、ただの一言も声があがらない。軍隊が行った所、行った所に慰安所がありました。切符を持ち、列を作って並んでいる兵隊たちに、私たちは体を提供しました。つらくて私たちは半狂乱でした。中国、東南アジア、南洋群島、アリューシャン列島で、性の提供をさせられた娘たちは、さんざん弄ばれて、足手まといになったらほっぽり出され、荒野を彷徨い、凍てつく山野で食もなく、野犬か狼の餌になり、骨はさらされ土になりました。南方で死ねばジャングルの穴に捨てられ、親元に知らせる術もない。それを私は見たのです。この目で女の地獄を。この一年ばかり、かつての同僚の顔がマザマザと浮かぶのです。私には耐えられません。どうか供養塔を建ててください。こんな恥ずかしいことを話すのは私しかいません。〉

訴えは聞き入れられ、施設の小高い丘に一本の檜の柱が立ちました。朝日新聞の「天声人語」、TBSラジオの「石の叫び」で取り上げられると、大きな反響を呼びました。「木の柱は朽ちてしまうので、是非、石碑を建てて下さい」と多くの資金が集められ、柱は立派な石碑に変わりました。石碑を囲む166個の石は協力者の数を表しているそうです。

この「かにた婦人の村」の従軍慰安婦の碑よりも12年も前に、偏見と無理解の中、個人で、それも元兵士であった男性の手で、「名も無き女の碑」が建立されていたのです。

戦後、善一さんは、何回かアングウル島に赴き、一人で遺骨を收拾し、現地に慰霊碑を建立。そして、亡くなるまで島の酋長宛てに、供養の経費を送り続けたそうです。

多くの兵士が戦死していく軍隊で、衛生兵は人を生かすことが任務でした。また、大勢の人のために美味しい菓子を作ろうと努力する職人魂が、生きて帰れなかった不幸な女性たちへの鎮魂碑となったのでしょう。

あるとき、私は慰霊碑を訪れて驚きました。今にも倒れそうになっていた石碑が真っ直ぐに立っているのです。苔むしていた石面がきれいに磨かれ、今まで無いと思っていた所に、文字がしっかりと現われているのです。この語りの初めに紹介したのがその文です。地元の檀家の皆さんのご厚意ということでした。

富美代さんは2013(平成25)年に亡くなりましたが、この石碑は、千葉県鴨川市の「花房」という美しい名の土地に相応しく咲いた、「清らかな善意の花」と言えましょう。

